

特集・地域研究の新地平

モシ農村のポリティカル・エコロジー

島田周平*

Increased Vulnerability of the Mossi Society in Burkina Faso

SHIMADA Shuhei*

This study is based on field survey conducted in a Mossi village located about 110km north-west of the capital city of Burkina Faso, Ouagadougou.

Out of 90 household heads in the village, 32 were interviewed. All were peasant farmers who produce millet, sorghum, maize and minor crops, such as yams, sweet potatoes and groundnuts. Even in a good harvest season, about a quarter of households can not meet their consumption needs. In a bad harvest, more than 80% of households experience grain deficits.

Of the 131 married male members of these 32 households, 71 or 54% are migrants living in the Ivory Coast. About 90% of these migrants are farmers. Two-thirds of the farmers have their own farm land on which they cultivate cocoa and/or coffee, and the rest are farm labourers.

Many of these migrants send home remittances, which constitute indispensable income for the villagers, not only for covering deficiencies in food supply but also for agricultural investment, such as the purchase of fertilizers.

Until the end of the 1960s, people migrated to the Ivory Coast as forced labour or as a consequence of the government's labour recruitment policy. Since then, however, circumstances have changed. People have migrated in search of more stable and prosperous conditions for engaging in agricultural production, while abandoning unsustainable production under precarious weather conditions back in Burkina Faso. They have purchased land and started to cultivate commercial crops.

But this effort to strengthen their access to land and more sustainable agricultural income has exposed them to unexpected risks. The abrupt emergence of an anti-Burkinabe (Burkina people) movement since last year's presidential election has shown that the vulnerability of land-holding migrants in the Ivory Coast is more serious than that of farm labourers.

The vulnerability of the Mossi village as a consequence also increased.

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

1. はじめに

2000年の11月から12月にかけて西アフリカのブルキナ・ファソで短期の農村調査を行った。モシの農村で、脆弱性の問題を考えるためである。脆弱性については後で説明することにして、なぜそのような問題に取り組むことになったのかという背景説明を簡単に行っておきたい。

この調査は、サハラ砂漠辺縁部の環境問題とりわけ砂漠化の要因を土壌劣化の面から追究しようという複数の調査班からなる調査研究の一環として行われたものである。この研究の中で私はもう1人の研究者とともに、環境悪化の社会経済的要因を探ることを求められた。¹⁾ そこで私は、環境破壊の進展に關与する社会経済的要因として脆弱性に焦点をあてて調査してみたいと考えたわけである。ポリティカル・エコロジー論において、脆弱性が経済社会関係と環境問題とを結びつける重要な概念であることが指摘されてきている [島田 1999: 215]。そのことを意識してのことである。

脆弱性とは、食糧や資財の欠乏状態や不足を意味するのではなく、危険や衝撃や緊張に対して無防備であり、安全が保障されておらず、それらに絶えず晒されている状態を指している [Chambers 1989: 1]。それは物に対する支配力の低下と関連していると考えられている。物に対する支配力といった場合、ここではリーチ他の定義による「様々な商品群に対する正当で効果的な請求権」を意味するものと考えておきたい [Leach *et al.* 1997: 16]。このように定義してみたところで脆弱性の概念は定量化できる概念ではなく、各地の政治的社会的特性を反映して複雑な様相を示すことになる。詳しくは島田 [1999] を参照していただきたいが、物に対する請求権といったところでそれが何らかの物の獲得が約束されている権利とは限らない。このため農民たちは請求権を有効たらしめるため、あるいは強化するために「休むことのない働きかけ」を行い、さらにその働きかけ先であるアクセス・チャンネルを常に拡張、活性化させるために日々努力していることを述べた。実際のところ農村で脆弱性について調査しようとするれば、農民のすべての行動を視野に入れその意味を検討しなければならないことになる。

短期の調査ではもとよりそのようなことは不可能である。したがって、いくつかの点に焦点を絞り聞き取りを行うしかない。今回は2月に行った予備調査の結果を受けて本村および出稼ぎ先の両方における農業生産とそれらの関係について聞き取りを行った。農民の家族構成、出稼ぎ状況、農業・非農業活動に関する聞き取りを行い、その結果をもとに彼らが抱える脆弱性について考えてみようというわけである。これはその速報である。

1) 国際農林水産業研究センターが実施する「砂漠化の評価と防止技術に関する総合的研究」の中で、「砂漠化危険地域の農業および集落形態の社会経済的評価」を担当することになり、現地調査を実施した。

2. はじめてのモシの村

私が訪ねたモシの村は、ブルキナ・ファソの首都ワガドゥグから北西に約110キロメートルのところにある町ヤコ (Yako) 近郊の村である (図1)。最も基本的な生産と消費の単位になっている土塀で囲われた家屋敷ザカに住む集団を「家」の単位として数えて90戸 (ザカの入り口に戸は無いのであるが) あまりの村であった。ザカは土塀で囲まれた1つのまとまった居住空間をなしており、そこには父系血縁者とその配偶者が住んでいる。その集団はイリと呼ばれ、イリの中で最年長の男性が家長にあたりイリ・ソバまたはザカ・ソバと呼ばれている。時には1つのザカに4世代が住んでいることもあり、そのようなザカでは居住者が40人近くにも及んだ (図2)。他方小さいザカでは10人を割っていた。

訪ねた時は主食のヒエ (トウジンビエ) やモロコシの収穫も終わった稔りの季節であった。ザカの前庭ザカ・ノーレにある穀倉には収穫されたばかりのヒエとモロコシが溢れんばかりにつまれ、その穀倉のかたわらで夫人たちが臼でヒエとモロコシを脱穀し風撰している。風撰され捨て置かれた籾殻はあたかも厚手の絨毯を敷いたように土を覆い、その絨毯をニワトリとホロホロ鳥が籾を求めて引っかき回す。その後を親鳥に遅れまいと雛の一群が続く。ザカの下水



図1 調査地点

場で泥浴びを楽しんだらしい泥んこのブタがブーブーとそこに現れ、風に誘われたふうを装いつつ眼はしっかりと風撰待ちの穀物を狙ってヤギがくる。穀物に近づきすぎたブタやヤギは容赦なくその場から追い払われるが、前庭の客としては認められているらしく前庭を離れることなく周囲を徘徊する。日射のあたらない木陰や穀倉の日陰では、夜なべの見張り仕事がよほどこたえたといった体の親犬が前後不覚の眠りに落ちている。よちよち歩きのヒヨコが体の上に

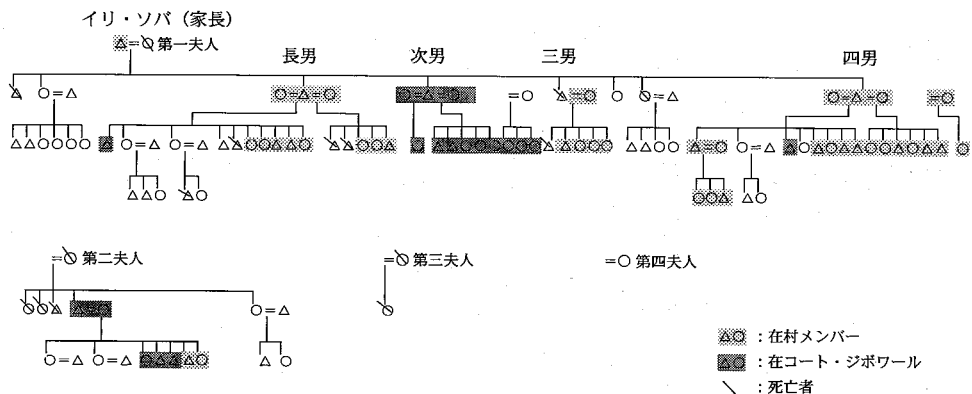
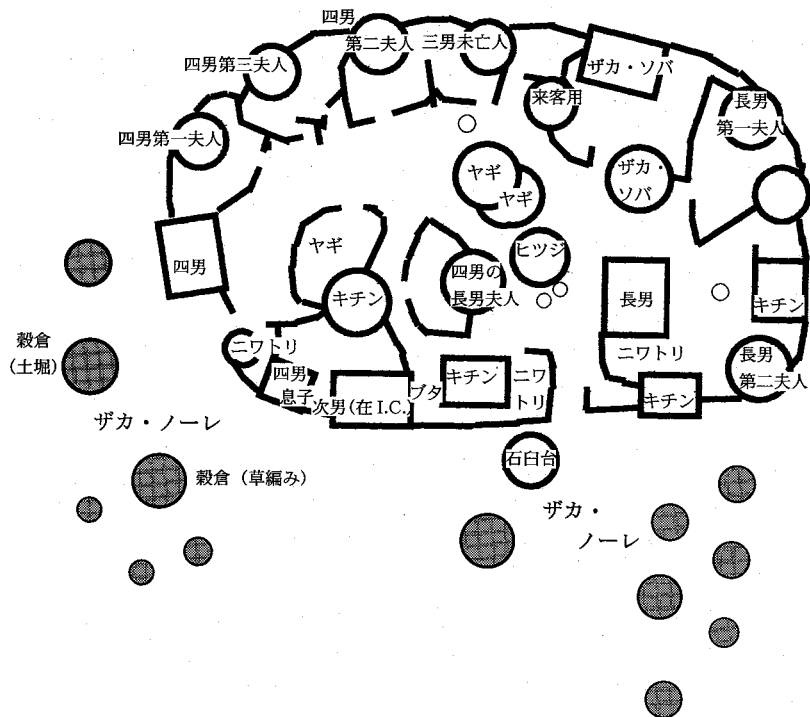


図2 大家族のザカ

上ろうがいっこうに目覚めない。遊び盛りの子犬は子どもたちに弄ばれ家畜にあしらわれ、それでも何か遊びはないかと庭をうろつき回る。そのうち昨夜の残りのサガボ（ヒエやモロコシの粉で作った主食）を食べている子どもを見つけさっそくお裾分けをねだりに行く。結局何ももらえず平手打ちを喰らうのだが、それでも飽きずにおねだりをつづけている。

こんなノアの箱船的一幕から抜け出てきたような前庭で私はインタビューを行っていた。私にはナイジェリアとザンビアに1村ずつ通いつめている村があるが、この村で受けた印象は格別であった。インタビュー中に子犬が私の靴の上で眠りこけてしまったり、ニワトリが私の背後に回り、飽きもせずズボンの後ろポケットのボタンを啄みにきたり、泥んこのブタが危うく私のズボンに泥を塗りつけそうになったり、なにしろ家畜が人間の生活空間で自由な行動を許されているのである。

家畜同士の争いごとが少ないこともおどろきであったが、人々が声高に言い争う姿も1度も見なかった。そしてそれらの動物たちがまき上げる穀物殻や土埃の中、飽きもせず興味津々の様相で始めからおわりまで静かに私のインタビューに聞き入る子どもたちの姿も新鮮であった。川田順造氏の著作をいくつか改めて読み直して、モシ社会で私が受けた印象が必ずしも私個人のものではなく、川田氏が1960年代からずっと見つけ描き続けてきたモシ社会の中にも発見されることに感動を覚えた [川田 1976; 1995a; 1995b]。正直に言うと、川田氏の著作を読んだ後で再び村に戻った時に同氏のモシ社会像が現実の前に立ちはだかる想いで、その像を一時心の中にしまい込むのに苦労させられたくらいであった。

3. 村の外にあるもう1つの村

そのような前庭でインタビューを進めていくうちに、いっけん平穏で牧歌的に見えるこの村の社会が、予想を超えるスケールで外部に拡張し、よその世界と深く結びついている様子がわかってきた。

この村のほぼ1/3にあたる32戸のザカで聞き取りをした。インタビューに応じてもらったのは主としてイリ・ソバであった。イリ・ソバが不在だったり高齢のためインタビューをその息子に頼んだ例（2例）と朝から飲みはじめたモロコシ酒（ダーム）が記憶の糸を絡ませたために結局20代前半の息子にインタビューを交替した例（1例）の3例だけがイリ・ソバ以外の聞き取りとなった。

インタビューにあたってザカに住んでいるすべての人と、ザカには現在住んではいないもののイリ・ソバと父系血縁関係にある男性とその家族についてもできる限り家族構成や現在の職業・居住地について聞いた。しかしイリ・ソバが高齢で、彼の息子たちの多くがすでに家族を持つ既婚者となっている場合にはイリ・ソバの兄弟やオジにあたる人々に関する情報は求めなかった。

3.1 大人たちはどこへ行った

こうして聞き取りを行った結果が表1である。この表は、現在村に住んでいる既婚男性と他のところに住んでいる既婚男性の数を示している。既婚者総数 131 人のうち 54% の人がコート・ジボワールに出かけていて村にいないことがわかる。さらに表2は、村の外に出ている既婚者の仕事の内容を尋ねた結果を示したものである。コート・ジボワールに出かけている人の約9割が農業関係の仕事をしていることが明らかとなった。不明の2人を含めても農業関係以外の仕事に就いている人は1割に満たない。非農業ではコーラの取引を行っているコーラ商が3人とコック1人の4人にすぎなかった。しかもその農業関係従事者のうち約2/3は自らの農地を所有する小農であった。残りの約1/3は農業労働者であった。

オート・ボルタ（現在のブルキナ・ファソ）の人々が、植民地時代に強制労働や軍役のため沿岸部の植民地に駆り出され、戦後強制労働が廃止された後は白人雇用者側が設立したリクルート機関を通じた労働者の徴募に応じ、独立以後は出稼ぎに関する政府間の取り決めに従ってコート・ジボワールにたくさん出かけてきたことはよく知られている [Amin 1972]。1960/61年のセンサスによれば、当時のオート・ボルタ国民の約7.1%の人が国外に出かけていたという。その他の資料でも1960年代中頃には、一時出稼ぎ者も含めれば約50万人のオート・ボルタ人がコート・ジボワールに出かけていたと推計されている。国民の1割に近い率である。しかも出稼ぎ者の中でモシの人が最も大きな比重を占めていたこともよく指摘されてきた事実である。モシ社会がオート・ボルタの中では人口密度が高く、労働者の強制的徴募に適した組織性を持っていたことをその理由としてあげる研究者もあった [Amin 1972: 96]。

したがって、モシの農村でコート・ジボワールへ出稼ぎ者が居てもそれは旧聞に属することと驚くに値しない。しかし今回の調査で判明した出稼ぎ農民の多さ、土地持ち農民比率の高

表1 既婚男性の居住地

K村在住者	52人 (39.7%)
ブルキナ・ファソ国内他地域	8人 (6.1%)
コート・ジボワール	71人 (54.2%)
総数	131人 (100%)

表2 村外居住者の職業

	非農業 従事者	農 業		農業 小計	不明	合計
		農地所有者	農業労働者			
ブルキナ・ファソ 他地域居住者	2 (25%)	4 (50%)	1 (12.5%)	5 (75.5%)	1	8
コート・ジボワール 居住者	4 (5.6%)	42 (59.2%)	23 (32.4%)	65 (91.5%)	2	71
全 体	6 (7.6%)	46 (58.2%)	24 (30.4%)	70 (88.6%)	3	79

さは新しい発見であった。2月に予備調査を行った時に、コート・ジボワールへの出稼ぎがかなりの比率にのぼるらしい予感を得ていたが、これほどの比率にのぼるとは予想していなかった。

ところで、これまで「出稼ぎ」と書いてきたが、出稼ぎと言っては正確さを欠くかもしれない。「出稼ぎ」先で農業に従事している人の約2/3がコート・ジボワールで自分の土地を持つ土地持ち農民になっているのである。土地持ち農民の約6割の人は土地を入手してからすでに10年を超えており、家族もコート・ジボワールで生活している。未婚の独身者が多かった1960年代の出稼ぎ者とは内容が異なってきている [Amin 1972: 404]。

土地所有農民の4割強が入手から未だ10年を経していない新参農民である。とはいえ彼らも入手した土地にココアやコーヒーといった樹木作物を栽植している。当然彼らもコート・ジボワールに長期に滞在する覚悟で土地を入手したのである。これは「移住」と言った方が適切かもしれない。しかも、この村からコート・ジボワールに出かけた農民の多くがコート・ジボワールの中でもマ (Man) 近郊やその他2, 3カ所に集中して居住していて、移住先でも本村での地縁的結びつきを生かした協力体制が生きている。この意味でこの移住は分村移住に近い形態と言ってよいかもしれない。

父系血縁集団を構成する既婚男性の半分がこの地を離れ、よその地で農民として定着しているとすると、私が眼にしているモシの農村社会は彼らの社会全体の半分にすぎないということになる。しかもその半分が、もう1つの半分の存在なしには成り立たないようになっていることがさらに明らかになってきたのである。

3.2 出かけた先で

コート・ジボワールで土地持ち農民となったこの村の出身者たちは、出かけた先の土地でコート・ジボワール人の地主との間で「土地譲渡」契約書を取り交わし、そのうえで樹木作物を栽培している。これはコート・ジボワールの地元住民からみれば立派な外来の入植者である。ここに深刻な問題が横たわっている。今年の10月に実施されたコート・ジボワールの大統領選挙の運動中に国内で発生したブルキナ・ファソ人虐殺事件や排斥運動が、それを象徴する事件であった。

村人の話によれば、土地譲渡は彼らと地主との間で売買価格の一致を見た段階でその土地の役場に出向き、土地譲渡の許可を得てから正式な売買契約書を取り交わしているという。今回の調査では、残念ながらコート・ジボワールでの実態調査を断念せざるを得ず、彼らが所持しているという土地譲渡契約書あるいは土地権利書などがどのようなものであるのか確認できなかった。しかし村人も心配しているように、問題はこれらの書類の法律上の正当性ではなく、その実効的有効性であろう。これらの契約書がいかなる時も確実に土地所有を保証するものであるかどうかの問題とされなければならないのである。

村人に、今回のような暴力的な排斥運動が起きても、事態が沈静化すれば自分が購入した土地に戻ることは可能かと聞いたところ、それは簡単なことではないという返事が多かった。一部の排斥運動にみられる暴力は、書面による契約内容を無効にしてしまう力を持っているのだ。これでは、土地を購入したブルキナ・ファソ人農民が一方的に追い出しをくうことになる。今回の暴動によるものではないが、それ以前にコート・ジボワールの地主との間でトラブルが起き、結局地主から購入した土地を手放さざるを得なかったという農民が2人いた。幸い昨年来の混乱で土地を失ったという農民は1人もいなかったが、事態の推移を固唾を飲んで見守っているという状況であった。

土地を入手して10年未満の人たちのコーヒーやココア農場はようやく生産が始まったばかりの新しい畑がほとんどである。それらの土地は、購入に要した多額の資金を回収する時期にさしかかっている。土地購入後10年未満の人のほとんどは自分の畑の一部で米やトウモロコシを栽培しつつ他人の農場で農業労働者として働き続ける。その収入で少しずつココアやコーヒーの木を増やしていく。コート・ジボワールでの農業労働の経験がある人は異口同音に、コート・ジボワールではよく働いたという。乾季でも仕事が途切れず、自分の農場の樹木作物が収穫できるようになるまで、農業労働者としても懸命に働かなくてはならないからである。そしてそんな中から故郷のこの村への送金もしていたという。

今回のような排斥運動は主として土地所有者を攻撃対象とするので、農業労働者より土地所有者の方が迫害を受ける可能性が高い。彼らは家族を伴っている人が多いので、事態の急変に戸惑うことも多い。今回インタビューを行ったほとんどすべての人が、「今回のようなことになったら土地を持っているよりも農業労働者の方が安全である」と言った。

土地を所有し、樹木作物を栽培し、経済基盤を安全なものにするための努力が、ちょっとした政治的駆け引きによって誘発されたエスニック問題によって、逆に危険を引き寄せる結果をもたらしてしまったということになる。コート・ジボワールの大統領選挙と国会議員選挙をきっかけに、ココアやコーヒー畑所有者の方が農業労働者より脆弱性が高くなったということである。

3.3 移住者からの送金

聞き取りを行ったザカの中では、ヒエとモロコシが平年作の年でも翌年の収穫直前にヒエを購入しているザカが少なくない。たとえば1998年は、32戸の内27戸が「平年作以上」であったと評価した年であった。不作だったと言った家は32戸の内5戸にすぎなかった(表3)。しかしこの年の翌年の雨季、すなわち次の収穫直前に穀物を購入しないで済んだ農家は12戸にすぎなかった。平年作以上穫れたという農家の約1/4が自家消費分を生産できない可能性がある。ちなみに昨年は近年にない不作の年であり、32戸の内24戸が不作を訴えた年であるが、今年の雨季に穀物の購入をした農家は27戸であった。購入の必要がなかった農家は5戸に

すぎなかった。少しでも不作になればごく一部の家を除きほとんどの農家が自家消費穀物に不足を来すというのが、この村の穀物生産の実態である。

もちろん購入したヒエすべてが自給用に消費されたというわけではない。2年前に亡くなった父親の葬儀を執り行うために4袋のモロコシを買った人や、コート・ジボワールから送金があったので予備の意味で穀物を買増したという人もいた。しかし、購入理由の中で1番多いのが貯蔵穀物が底をついたから（あるいはつきそうになったから）という答えであったことを考慮すれば、雨季の穀物購入を食糧不足補填のための購入と考えることはさほど強引な結論というわけではなからう。

穀物購入のための現金調達方法としては、ニワトリ、ホロホロ鳥、ヤギ、ヒツジなどの売却が1番多くあげられる。しかしそれと同じくらい高い頻度で人々があげたのがコート・ジボワールからの送金であった。送金は、同一人からの送金であっても年によって送金額、送金時期が一定しない。毎年確実に期待できる送金収入額といったものは存在しないようだ。しかし、村人は送金に大きな期待を抱いている。不作の年には村からその情報が伝えられるので、自然送金額も大きくなる傾向にあるという。

化学肥料の購入に対する送金の役割についてもコート・ジボワールからの送金が同じような役割を担っていることが分かった。表4は、化学肥料の使用の有無、使用したことのある人は最初に利用した年を聞いた結果を示している。化学肥料の使用は1960年の独立年に政府から

表3 収穫状況と翌年のヒエ（トウジンビエ）購入量

年	1998	1999	2000
良作	9 (28.1%)	3 (9.4%)	19 (59.4%)
平年作	18 (56.3%)	5 (15.6%)	10 (31.3%)
不作	5 (15.6%)	24 (75.0%)	3 (9.4%)
購入量 (100kg 袋 / 農家)	—	2.1	4.0
購入無し農家数 / 総農家数	—	12 / 32	5 / 32

表4 化学肥料の使用開始年

使用開始年	農家数
30年以上前	3
29年—20年	2
19年—10年	5
9年—5年	6
5年未満	8
年代不明	2
使用経験無し	6

無料配布を受けたという農民が1人いたほか、父の代から使っているという家を含め20年以上前に使用したことのある家が5戸あった。これに対し使用して10年以上20年未満の家が5戸、10年未満の農家が14戸であった。特にここ5年未満の農家が8戸と近年に利用を開始した農民が多い。これまで使用したことのない農家は6戸（約2割）にすぎず、おおかたの農民は化学肥料をすでに使用した経験があるといえる。

しかしこの化学肥料の使用が農民の間に定着しているかとなるといささか疑問が残る。金が無かったからといって簡単に肥料の購入を止めたり、逆に乾季に出かけた金鉱で小さいながらも金塊を掘り当て予期せぬ金のできたので去年は3袋買ったとか、購入の動機にムラがある。化学肥料の購入予定量をあらかじめ決めている農民は聞き取りの範囲では皆無であった。過去3年間1度も化学肥料の投入を欠かさなかった農民は5人しかいなかった。ホロホロ鳥やニワトリ、あるいはヒツジを売ってでも必ず化学肥料は購入するという農民は非常に少ないのである。

コート・ジボワールからの送金があれば肥料を購入するという意見が多かったが、これも金鉱掘りの臨時収入と同様に考えればよいのであろうか。化学肥料は、重要な家畜を費消してまで購入する価値はないが、送金といった臨時収入があった場合とりあえず買っておこうかといった程度の位置づけなのかもしれない。もっともコート・ジボワールの送金者の中には、送金を肥料の購入に充てるようにと指示して寄こすこともあるという。

送られてきたお金を何らかの現物として保管する「送金の現物化」として肥料は手頃な対象物であるのかもしれない。ちなみにインタビューした男性の中で、近くの町ヤコの銀行に口座を持っている人は皆無であった。化学肥料は、現金所持よりも安全な「貯蓄」の1手段であると考えた方がよいかもしれない。

4. 村の農業

すでにみてきたように、この村の表面的平穏は血縁集団の半分が構成する社会が見せている平穏であり、それは経済的にはコート・ジボワールにあるもう半分の集団の支えがあつてはじめて成り立っていることがわかった。しかし、これらの援助を前提としているとはいってもやはりこの村の農業も重要である。その点を最後にみておこう。

4.1 耕作

ほとんどの家は家屋敷ザカの周囲に自分の畑を持ち、その他に家から離れたところに数筆の耕地を持っている。各農民が土地に対して持っている権利は所有権ではなく用益権である。用益権といってもほとんどの人は父親や長兄から用益権を譲り受けた人が多く、土地は自分の家のものとの意識が強い。しかし新しく土地を確保したい時には草分け筋の家の長老たちから耕作地を割り当ててもらわなくてはならない。当然のことながら、この用益権を他人に譲渡する

ことはできない。

これに対し、コート・ジボワールではココアやコーヒー畑を村人間で譲渡している例がみられた。コート・ジボワールにおける土地に対する権利は、譲渡可能な私的所有権に近いものもあるようである。だとすると出稼ぎ先で購入した土地に対する権利の方が、形式的には自分が生まれた村での土地に対する権利よりも自由度が大きいものとなっていることになる。

ザカ周辺の畑ではモロコシとヒエを栽培し、時にトウモロコシを栽培することもある。4月頃までに耕地の整理をしておき、雨季の到来とともに播種を行う。ロバや牛を所有し犁で浅く耕起する家もあるが、多くの家では家畜を耕起のためというよりただ単に条播のための線引きに利用し、播種そのものはシュトゥアガと呼ばれる短柄鍬で穴をあけ手で播種しているという。トウモロコシはこのザカ周辺の畑に植えられるのがほとんどで、後で述べる一般畑に植えられることは少ないという。

ザカ周辺以外の耕地は森の畑と言われており、一般にザカ周辺の耕地より広く、畑の数も平均3畑以上と多い。森の畑といっても砂質土壌（ビシリ）に広がる一般耕地と、低平地に広がる粘土質土壌の多いコソレ畑とがあり、一般耕地ではヒエやモロコシが栽培され、コソレ畑ではヤムイモ、サツマイモ、イネ、そして野菜などが栽培されている。雨の降り方次第で、一般畑のできが良かったりコソレ畑のできが良かったりするのので、どのような種類の畑を持っているかによって、家ごと年ごとの作柄に違いが出てくる。

耕起（または線引き）と播種作業は、家畜の世話をしたり幼児の世話をする子供たちを除く家族全員が総出で行う。耕起における家畜や犁の貸し借りが少ないことが気になりその理由を聞くと、他人から借りると播種のタイミングを逸してしまい時期遅れになるからという返事が多かった。雨季の到来と同時に始まる播種作業は、村の中でほぼ同時に始まるようである。かつてコート・ジボワールに季節の出稼ぎに行っていた人たちは遅くとも4月には播種作業に間に合うように帰ってきた。しかし、先にも述べたように近年ではすでにコート・ジボワールに土地を所有している人はもちろんのこと、農業労働者として働いている人も帰らないことが多い。家で働き手が足りない場合に、家長はコート・ジボワールで農業をしている息子に助力を求めることがたまにある。そのような時によく取られる方法は、息子が帰郷するのではなく、彼の妻の内の1人が村に帰るという方法である。故郷の村よりもコート・ジボワールの村の方に若年、壮年男子労働力を投入するという傾向が強くみられる。

10月にトウモロコシが最初に収穫期を迎え、すぐにヒエとモロコシの収穫期となり大忙しとなる。この農繁期が過ぎたあたりからコソレ畑でヤムイモやサツマイモの収穫が行われる。インタビュー期間中がちょうどこの時期にあたり、何度かヤムイモをおみやげにもらったり蒸かしサツマイモをごちそうになった。ナイジェリアの湿潤サバナ帯のヤムイモに慣れた目にはこの土地のヤムイモは大きさが数分の1にすぎず、ちょうど日本のサツマイモほどの大きさしか

なかった。サツマイモの方は人参ほどの大きさもない小振りのものが多かった。ヒエとモロコシの生産不足を補うというにはいささか心許ない収穫風景であった。

収穫されたヒエとモロコシは家の前庭やザカ内にある穀倉に穂のまま蓄えられる。脱穀は必要に応じてその都度行われる。こうして生産された主穀のヒエとモロコシが、来年の収穫までもたない家がかなりあるはずである。にもかかわらず、今季どれほど主穀が不足するのか予測をたてている農民は1人もいなかった。穀物倉が底をつきかけた時が無くなった時だというばかりであった。トウモロコシを生産しているザンビアの村で農民たちが収穫直後にかなり正確に収穫量を推計しているのとは対照的であった。トウモロコシの粒が大きく、収穫後すぐに脱粒して袋詰めにして売却することに慣れているザンビアの農民と、袋詰めにして売却することなどほとんどないこの村の人々との計量換算に対する慣れの違いが大きいのであろう。もっともそんな彼らも、食糧不足時にはヒエを100キログラム袋で購入しているのではあるが。

4.2 肥料の投入

肥料の購入がコート・ジボワールからの送金に影響を受けていることはすでに述べた。これは送金が不足した時はあえて買わないということで、穀物の購入に比べて肥料の購入には一段低い関心しか払われていないこともすでに触れた。

肥料の効果を知らない農民はいないといってよい。肥料を使っていない農民もそのことを高く評価している。しかし農民に、どうして肥効を知りながら肥料を投入しないのかと聞くと、「土地に力をつけるより人間に力をつけた方がずっとましである」という答えが1人の農民から返ってきた。

表5に示したのは各農民に過去3年間の収穫の状況を評価してもらった様子を表にしたものである。平年作以上であった年を3、平年作を2、平年作以下を1で表してある。これを見ると、大不作の年といわれた去年ですら1/4の農家では平年作以上の作柄を記録しており、豊作の年だったといわれる今年でも約1割の農家は不作を訴えている。

農民たちは「ターガの木(カリテ)の実がたくさんなった年は豊作だ」といった諺があることは知っているが、結局のところ雨の降り方は予測できないという。当然畑の作柄も予測はつかない。肥料を投入してもそれが雨で流されるかもしれないし、作物が早魃で枯れてしまうかもしれない。畑に肥料をやるより、その金で体力をつけた方が確実だという考え方は、この地方の雨の降り方について聞いた後では至極妥当な考えのような気がしてくる。

作柄の善し悪しは、畑単位、家単位はもとより村単位でも違いがみられ、今年は調査村で作柄が良かったものの、周辺の村々では不作のところが多かったという。そのためこの村で穀物の購入販売を行っている農民グループ(「穀物銀行」と名づけていた)のメンバーたちは、今年の雨季に売れ残ってしまった55袋のヒエを、来年の雨季に高値で売ろうと今から皮算用をしていた。このように降雨の振幅の大きさは、生産を不安定にし、肥料投入意欲にも大いに影響

を与えていることがわかる。

4.3 家畜の飼養

先にノアの箱船のような家の前庭ザカ・ノーレの風景を描写したが、その描写に登場してきた家畜たちの生育サイクルと経済的役割がよくわからない。穀物の不足分を補うため、肥料を

表5 収穫の自己評価

農家世帯 番号	1998年 作況	1999年 穀物購入量 (100kg袋)	1999年 作況	2000年 穀物購入量 (100kg袋)	2000年 作況
1	2	0	1	15	1
2	1	5	3	0	3
3	3	3	1	11	2
4	3	0	1	30	3
5	3	0	1	9	2
6	3	3	1	10	2
7	3	4	1	3	2
8	2	0	1	5	2
9	3	0	1	7	3
10	2	6	1	14	2
11	1	6	3	0	2
12	2	4	1	3	3
13	2	4	2	3	2
14	3	2	1	2	2
15	2	-	3	-	1
16	3	-	1	0	1
17	1	3	2	2	3
18	2	2	1	4	3
19	2	0	2	3	3
20	1	4	1	6	3
21	2	0	1	0	3
22	2	0	1	4	3
23	2	3	1	5	3
24	2	9	1	4	3
25	1	5	2	0	3
26	2	2	1	4	3
27	2	0	1	5	3
28	2	4	1	3	3
29	2	0	1	5	3
30	3	0	1	8	2
31	2	1	2	9	3
32	2	0	1	6	3
作況平均	2.1		1.3		2.5
穀物購入量平均		2.1		4	

1: 不作 2: 平年作 3: 良作

買うため、生活必需品を買うため、あるいは数年前に亡くなった父親の葬儀を行うため、農民たちはその都度小家畜を売却して現金を作っている。

コート・ジボワールからの送金は基本的に送金者側任せであり、窮状を知らせて送金してもらおう時でも送金までに時間がかかるし送金が実際に行われるかどうか分からない。これに対し、小家畜の売却は容易であり確実である。特に女性にとってはブタの個人的な飼養が認められているのでブタの所有が重要な意味を持っている。ブタは時々残飯をくれる飼い主を覚えていて、彼女たちが声をかけると畑を一直線に駆けてくる。それはまさしく猪突猛進の走り、それが女性の所有の証を保証しているようでほほえましい。臨時収入があった時にこれら小家畜を買い足しする人が多いのは、現金化の簡便さと確実さのためであろう。

コート・ジボワールからの送金や金鉱での金採掘が予期せぬ収入をもたらした時に、牛やロバ、さらには馬といった大家畜を購入する場合もある。牛とロバは犁耕用、ロバと馬は運搬用に使役されるが、飼養している人が皆使役に使っているわけではない。金を掘り当てて馬を買った農民も、使役目的ではなく将来の売却を見込んで購入したと言っていた。ロバは犁耕のほか作物や飼料、屋根葺き材などの運搬に利用されるのはもちろんのこと、屠殺され食用としても利用されている。

これらの小家畜や大家畜の値段は、売り手と買い手の関係、家畜の大きさ、健康状態、売却時期などによって大きく異なり標準的値段といったものはない。聞き取りした事例で言えば、たとえば中型サイズのブタ1頭を売却してヒエ1袋（100キログラム）を購入した例や、ニワトリやホロホロ鳥を10羽近く売却して購入した例などがあつた。ヤギやヒツジは、大きいものであれば1頭でヒエ2、3袋を買うことができるという。牛やロバなどは当然のことながらもっと高く売れる。しかし農民たちは牛やロバを売る時に子牛や小さいロバを買い換えておくことが多いので、売却時の現金収入は必ずしも大きいとは限らない。

これらの家畜たちは、時々餌を与えられているが、基本的にはザカの中や前庭、それにザカ周辺の畑を中心に風撰で飛ばされた糞や人間の食べ残しさらには畑の刈り残しを食糧にしてほぼ自活に近い生活をしている。もちろん穀倉から失敬したり、料理中のものを失敬したりするのも自活能力のうちである。インタビューを行った収穫直後のこの季節、食糧も豊富で彼らの繁殖力は旺盛だと聞いた。ニワトリやホロホロ鳥はこの期間、5、6羽がたちまちのうちに20、30羽に増えるという。クリスマス前にこれらの鳥を農民から買い集め、車で首都まで運びそこから貨物列車でコート・ジボワールのアビジャンまで運ぶ商売を毎年行っている農民が1人いた。この村で1羽750 CFA Fr (100 CFA Fr [西アフリカ金融共同体フラン: Communauté Financière Africaine Franc] = 1 FF [フランス・フラン]) で買いつけたオンドリが、コート・ジボワールのアビジャンの市場 (トレッシュビル) では1500 CFA Frで売れるという。風撰によるお目こぼしも無駄なく農民によって回収されていることになる。

食糧が枯渇しはじめる雨季になると動物も体力を低下させるのか、さまざまな病気が流行り、短期間の間に多数の家畜が死ぬことも珍しくない。今年の雨季にもホロホロ鳥が大量に病気で亡くなったという。

主穀の恒常的不足にかかわらず、何とか危機的状況に陥らないで済んでいる根拠の1つがこの家畜飼養にあることがわかったものの、これら家畜の生育サイクルがよくわからない。それらが農家家計に対して果たしている経済的役割をもっと正確に解析する必要がある。それは、コート・ジボワールからの送金の経済的重みを評価するうえでも不可欠なことである。小家畜の経済的位置づけが今後の重要な研究課題として残った。

5. おわりにーモシ農村の脆弱性ー

「はじめに」で述べたように、今回の調査の目的は農村の脆弱性を調べることにあった。「家」の構成員の半分が隣国に出かけ、そのうちの2/3の人が土地を購入し家族を住ませ、故郷の村では平年作で食糧不足がおき隣国の家族からの送金頼みという現実を前にして、私はこのモシの農村の脆弱性といった問題の複雑さに頭を抱えることになってしまった。それは今回のプロジェクト全体が関係している、砂漠化危険地域の環境問題を考える際の難しさにもつながる。

このモシの農村でたとえ不作が2年続いたとしても、コート・ジボワールからの支援があればこの村の人たちが絶望的な飢餓に見舞われることはなかろうと思う。しかし逆に、平年作が続いたとしても、昨年来厳しくなっているコート・ジボワール国内でのブルキナ人排斥運動が激しくなれば、その影響は計り知れない。そのことを一番良く知っているのはもちろん農民たち自身である

今回の調査期間中、朝の8時から放送されるモシ語のラジオ放送（サバンナ放送）を食い入るように聞いている村人の姿をよく見かけた。ある時などラジオを聴くためにインタビューの一時中断を求められたことさえあった。ちなみにその時のニュースはコート・ジボワールの港湾で働くブルキナ人たちがコート・ジボワール人労働者たちから追い出しを受けたというニュースであった。

今や雨がくるのを神に祈るのと同じ気持ちで隣国の政情が安定することを祈っている感じである。今回の大統領選挙で過去にブルキナ国籍を使ったことがあることを理由に立候補が認められなかったワタラ（Dramane Alassane Ouattara）氏の問題は、かつて農業労働者であった出稼ぎ民の2/3が土地持ち農民になってきている現実と関連づけて理解されなければならないと考える。出稼ぎ労働者の問題をめぐるコート・ジボワールとブルキナ・ファソ（かつてのオート・ボルタ）間の交渉は植民地時代からみられた。しかし1969年にガーナが外国人を追放した後、行き先を失ったオート・ボルタの出稼ぎ民を代わりに受け入れたのがコート・ジボワールであったことをみてもわかるように、1970年代前半までは少なくともコート・ジボ

ワールのコーヒー、ココア生産農民とブルキナ・ファソ出稼ぎ農民とは、雇用者と被雇用者という経済的関係で結びついていたといえる。それが、いつの頃からか、ブルキナ・ファソの出稼ぎ農民が「移住民」化することによって、両者の関係に変化が生じてきていたのではなからうか。そして今回、ワタラ氏の国籍問題が容易にブルキナ人農民排斥運動や迫害事件に発展する素地がすでにできあがってきていたということではなからうか。

自然環境のリスクが大きい乾燥サバナ帯を離れ南の湿潤地帯で土地を手に入れ、より安定した自然環境のもとでリスクの少ない生産拠点を構築したつもりが、結果的により大きなリスクを背負い込んでしまったことになる。このリスクは出稼ぎ民のみが直面しているものではなく故郷の本村をもまきこむ問題であることは今回の調査結果が示唆しているとおりである。モシの農村社会は自然環境の悪化によるものではなく、政治社会関係の悪化に起因する新しい脆弱性増大の問題に直面しているといえる。

引用文献

- 川田順造. 1976. 『曠野から』 中公文庫.
_____. 1995a. 『アフリカの心とかたち』 岩崎美術社.
_____. 1995b. 『サバナに生きる』 くもん出版.
- 島田周平. 1999. 「新しいアフリカ農村研究の可能性を求めて—ポリティカル・エコロジー論との交差から—」 池野 旬編 『アフリカ農村像の再検討』 アジア経済研究所, 205-254.
- Amin, S. ed. 1972. *Modern Migration in Western Africa*. Oxford: Oxford University Press.
- Chambers, Robert. 1989. Editorial Introduction: Vulnerability, Coping and Policy. In Chambers, ed., *Vulnerability: How the Poor Cope*. I.D.S. Bulletin 20(2). Brighton: IDS Publications.
- Leach, M., R. Mearns and I. Scoones. 1997. *Environmental Entitlements: A Framework for Understanding the Institutional Dynamics of Environmental Change*. I.D.S. Discussion Paper 359. Brighton: IDS Publications.